

CONTENTS

**カントボーイ(乳首開発中)が
おちんぽケースの自覚を持つ話♡**

含まれる要素

**カントボーイ
クリイキ
乳首責め
玩具責め
挿入
イラマチオ
首絞め
言葉責め**

人物紹介

四季風瑠夏（しきなぎ るか）

183 センチ/68 キロ

顔がとにかく良い。自分の名前が好きじゃない。
目が悪い+目立たないために黒縁眼鏡をかけている。
両親は幼い頃に離婚しており、父と二人暮らし。

父が女の子を望んでいたこともあり、中学生まで、
家で女の子の服を着せられていた。声変わりし、
身長が伸びてからはなくなったが、性的虐待も受けていた。
その頃の記憶が、性格を歪ませている。
冬野に執着している理由は、過去の自分と重ねているから。

冬野稀（とうの まれ）

168 センチ/52 キロ

カントボーイ。それ以外は至って普通の学生。

四季風の顔が好き。流されやすい。

自分の名前にコンプレックスを感じている（その名前が自分の異常さを言い当てているように感じるため）。

カントボーイ(乳首開発中)がおちんぼケースの 自覚を持つ話♡

冬野稀は、誰にも知られてはいけない秘密を持っている。

性自認は男だ。力は弱いし、筋肉もつきにくいけれど、骨格は男。普段も男の格好をしているし、男として振る舞う。女に間違えられたことなんて、今まで一度もない。

けれど下着を脱げば、そこには女の特徴がある。子宮もあるから、生理も来る。ゴム無しで男とセックスすれば、妊娠する可能性だってある。

冬野は、そんな自分の身体が嫌いだった。

名前も、同じくらい嫌いだった。

稀——めったにない、珍しい。親がどんなつもりでつけたのかは知らない。ただ冬野にとっては、自分の異常さをそのまま言い当てられているようで、呼ばれるたびに肌が粟立った。

普通の世界に、自分は存在できない。誰とも深い関係を築けない。

そういう人生しか送れないのだと、何もかも諦めていた。

——四季風瑠夏に出会うまでは。

四季風とは、高校二年になって、初めて同じクラスになった。

顔が良く、背も高い。その上頭がいい。四季風はとにかく目立つ男だった。だから当然、遠い存在だと思っていた。なのにどういうわけか声をかけられて、気づけばつるむようになっていた。

四季風は、他の連中と違った。冬野が体育を見学していても、着替えをトイレで済ませていても、理由を詮索してこない。その距離感が、冬野はありがたかった。

多分、人にあまり興味がないんだろうと、冬野は思っていた。

四季風は事に人間関係においてそれなりに煩わしい思いをしているようだったし、自分のような存在は好都合なはずだ。冬野は人を避け続けているから、誰も話しかけてこない。そんな冬野の隣にいれば、声をかけられずに済む。四季風はそう考えて、自分に近づいたのだと。

……けれどその実、四季風はすべてを知った上

で、冬野に近づいていた。

『そんな君だから、僕は声をかけたんだ』

『おちんぼケースとして育てるの大変かな？』と
思ったけど、そんなことなかったね』

『拒否されたら、僕、なにするかわかんない』

そう言い放ってきた四季風に抱かれてから、二年が経つ。

高校を卒業して、四季風と同じ大学に進んだ。
ルームシェアを始めて、毎晩当たり前みたいに抱かれる。

なぜ四季風が自分にここまで執着するのか、冬野は未だにわからない。



肩を押されて、冬野はベッドに倒れ込んだ。間近に見える四季風の瞳に、灰色の光が宿っている。

「まだ、するのか、」

「たりなくて」

「……もう、つかれた、」

身を振り、枕に顔を埋めると、四季凧が覆いかぶさってきた。ちゅ、とうなじに吸い付かれて、身体に力が入る。絡められた指先がじんと痺れて、冬野は深く息を吐いた。

「君は寝てていいから」

「……昨日もそう言って、上に乗らせたくせに…
…！」

「はは、ごめん。君のすきなことしかしない。約束する。だから、ね？」

すっかり硬度を取り戻したそれを尻に擦りつけられる。それだけで、耳まで熱くなる。

「想像した？ えっちだね」

「おまえに、言われたくない！」

「僕は自分で認めてるもん。これでも手加減してあげてるんだから、さ」

「っ、ん、」

蜜口に指が食い込んで、冬野は息を詰めた。恥ずかしい水音が部屋に響く。容赦なく中を蹂躪する指をすんなりと受け入れてしまう身体が嫌い。

「あ、……っ♡ ッあ、う……♡」

「ふふ、もう腰へこへこして、かわいいね」

耳元で囁きながら、四季凧は指を増やしていく。

お腹側の薄壁を指の腹で撫でられるたび腰が勝手に浮いて、四季風に尻を突き出すような体勢になる。

「こんなに濡れてるし、もう挿れても大丈夫そうだね」

指を引き抜かれて、代わりに、比べ物にならない質量が蜜口にあてがわれた。先端が浅く沈んだだけで、そこが待ち構えるようにひくりと震える。

「——ッ、あ、あッ……っ♡」

ゆっくりと、けれど確実に中を押し開かれていく。奥までみっちりと満たされて、それだけで軽く達しそうになる。

「っ、ん、……うう、♡」

「いい？ もう動いて」

「……いちいち、聞くな、」

「痛い思いしてほしくないからさ。ねえ、大丈夫？ 苦しくない？」

「苦しく……ない、けど……」

「けど？」

「～～!! 変な感じする、から……！ はやく動いて、……」

「はは、了解」

四季風が腰を動かし始める。最初はゆっくりと、様子を窺うように。けれど冬野の声が跳ねる場所を見つけると、そこばかりを狙ってくる。逃げ場のない体勢で弱いところを的確に挟られて、冬野は声を抑えられない。

「あ、っ、ああ、ああ♡♡やだ♡♡」

「え、嘔吐くんだ？」

「——あ、」

快感に逸らした首筋に、掌を這わされた。頸動脈を探り当ててきた指に、力を込められる。やめと言葉にしたかったけれど、口から漏れるのは喘ぎ声ばかりで、言葉にならない。

「あ……っぐう♡♡♡」

「ふふ、首きゅってすると、おまんこもきゅってなるね」

四季風の言うとおりであった。指に力を込められるたびに中が疼いて、四季風の性器を締めつけてしまう。

「変態」

「————ッ!!♡♡」

ぎゅうと力任せに首を絞められて、目の前にチカチカと星が飛んだ。ふ、と力が緩んで、一気に

入り込んできた酸素が喉を焼く。

「っ、は、っく、……げほ、……」

「……あれ？　今イったよね？　なんで言わないの？」

「っは……♡♡ごめ、ごめんなさ、……」

「ねえ、なんで今イっちゃったの？　わかんなかったから教えて？」

「っん、っび、……くび、しめられて……♡♡」

「うん、それで？」

「……………イ、った……」

「言葉足りないと思うよ？　変態って言われて余計興奮しちゃったんだよね？」

「っ……………う、うん、」

「へえ？　救えないね」

「——ぐ、」

また首を強く掴まれて、後ろを向かされる。口の中を舌でかき回されて、飲みきれなかった唾液が顎を伝う。苦しいのに、それすらも快感を煽っていく。

「ん、ん……っ、ふ、……っ♡」

唇が離れたかと思うと、仰向けにされた。繋がったまま体をひっくり返されて、内側を捏ねられ

る感覚に、冬野は喉を反らす。首を掴まれたまま、今度は奥を突かれた。ぐりぐりと子宮の入り口を暴かれて、視界が白く染まる。

「ッああ♡♡ああッ♡♡」

「はは、顔真っ赤」

「うう、っ、あッ♡♡　っ、あああ、…っ、くるし、……………、いぐ…………ッ♡♡」

「ちゃんと目、開けて。僕のこと、見て」

言われて、閉じかけた瞼をこじ開ける。見下ろしてくる四季凧と目が合った瞬間、羞恥と快感が一緒くたになって膨れ上がった。

「——ッ、イク♡♡♡——ッ!!♡」

足の爪先が丸まって、腰が何度も痙攣する。快感は長く尾を引いて、なかなか戻ってこられない。

「は……あ……♡♡」

「ちゃんと言えたね。えらいえらい」

首を絞めていた手が離れて、かわりに頭をわしゃわしゃと撫でられる。そうして達したばかりの中を何度も突き上げられる。過敏になった体に快感が走って、冬野は声にならない声を漏らす。

「んっ、あ、まって♡♡やすませて♡」

「だーめ」

膝裏を掴まれて、足を上げさせられる。四季風の呼吸が乱れはじめて、汗が滴り落ちてくる。

いつも飄々としている四季風がオスに変わる瞬間が、冬野は嫌いじゃない。

「あ、っ、あぁっ♡♡またイク、イっちゃう、」

「稀くん、……っ、締めすぎ……！」

四季風が身を屈めて、強く抱きしめてきた。冬野の中で、四季風の性器がびくびくと震える。

「……っ、……♡♡♡♡」

四季風が吐精して、しばらく二人分の荒い息だけが、部屋に落ちた。汗ばんだ肌が重なったまま、心臓がばらばらの速さで脈を打つ。やがて四季風が性器を引き抜くと、繋がっていた場所から、とろりと愛液がこぼれた。

四季風は身を起こすと、ゴムを外した。先を縛ってゴミ箱に捨て、もう指一本動かせない体に、口づけを落としてくる。決して交わることのない白濁の行く末を見て、感傷に浸る暇もない。

「っ、」

最中のはあんまり触れられない乳首にもキスされて、冬野は肩を震わせた。四季風はちらりと冬野を見たあと、唇を寄せてきた。そうして「大好き」

と囁いて頭を優しく撫でてくる。

「……君は？ 僕のことすき？」

「……うん」

「よかった」

安心したように笑った四季風に、ぎゅう、と抱きしめられる。

散々好き勝手にしておいて、こんなの、ずるい。



……最近セックスしてない。

まあ最近、と言っても、せいぜい一週間くらいなのだけれど。生理でもないのにこんなに長い間しないのは、初めてのことだった。

四季風は、誘ってくる様子もない。何かしただらうか、と不安になってしまったが、特に普段の様子と変わらない。

「稀くん、どうしたの？ 手、止まってるよ」

「え、あ、うん……」

言われて、慌ててノートパソコンのキーボードを叩く。四季風が骨組みを書いているから、それを自分の言葉に変えて打ち込むだけだ。

「……」

色々考え込んでしまう頭を振って、無心でキーボードを叩く。すると不意に、四季風に後ろから抱きしめられた。ほっとしてしまう自分に驚く間もなく、胸を触られた。着ているシャツの上から乳首を捻られる。こんなふういきなり胸を触られることはなかったから、動揺してしまう。

「……四季風？」

「だめ？」

「……だめじゃ、ないけど、」

振り返れば、四季風の綺麗な顔がすぐそこにあった。すう、と細められた目と視線が合う。その顔に弱いのを、四季風は知っている。

「僕のことは気にしないでいいから。ほら、課題やらないと」

「……うん……」

ないに等しい胸を揉まれ、時折さすさす……♡と、指の腹で乳首を擦られる。時折うなじや耳の裏に唇を寄せられたら、もうだめだった。今までしてきた行為が、勝手に頭にフラッシュバックする。

まだ回数を重ねていない頃、痛い、苦しいと冬

野が泣けば、四季風はあやすようにいろんなところを舐めてきた。そして冬野が首が特に弱いと分かると、そこを執拗に吸ったり咬んだりし、ついには首を絞めるようになった。普通はそれで行為への恐怖心が増幅するはずなのに、全ての感覚がバグった頭はそれすらも快感を見いだした。「こんなことでも興奮するの？」と四季風に笑いながら動画を撮られて、身体が熱くなった。

苦しいことも、はずかしいことも、どうしようもなく気持ちいいのだ。

自分がこんなにも浅ましくてはしたない人間だとは知らなかった。この身体を嫌っていたのは、そんな自分と向き合うのが怖かったからなのだ。四季風はそれを暴いてしまった。

……だから、仕方がないのだ。抵抗することを忘れてしまったのも、拘束されているわけでもないのに振り払えないのも、ぜんぶ、四季風のせいだ。これから何をされてしまうんだろう。期待が止まらない。

「ん、っ……♡」

また指が動いたと思えば、今度は乳輪の外周をなぞられた。くるくると円を描いて、尖った先端

を避けていく。思わず背を反らしかけて、慌てて姿勢を戻す。

「今胸突き出そうとしたでしょ」

「して、ない……♡」

「してたよ。……乳首、触ってほしいんだ？」

答えられずにいると、爪の先で、かり、と先端を引っかかれた。鋭い刺激に、指に力がある。画面には意味をなさない文字列が並びはじめる。

「あーあ、誤字だらけ」

言いながら、四季風は左右の乳首を同時に摘まんできた。今度はゆるく捻られて、じん、と下腹部に痺れが走る。

「ふ、……♡」

「こんなペースじゃ、朝までかかっちゃうね」

四季風はくすりと笑って、手を離れた。

「じゃ、ご飯作ってくるね」

「……え？」

「え？ っ。はは、もっと触ってほしいの？」

「……………そういうわけじゃ、」

「そっか」

「……」

四季風はあっさりと立ち上がり、キッチンへと

向かってしまった。いつもなら食い下がるか、こちらの言い分も聞かずに押し倒してくるのに。

四季風の作った夕飯を食べて、順番に風呂に入り、ベッドに入る。四季風はいつものように後ろから抱きしめてきた。腹に腕が回って、背中にびったりとひっついてくる。けれど、それ以上は何もない。キスひとつ落ちてこない。

そもそも毎日のようにセックスするのが普通になっていたのがおかしいのだ。健全だ。

だけど。

……なんであそこでやめたんだろう。

物足りない、なんて。そんなこと、思いたくない。思いたくないのに、体の芯が、じくじくと燦る。たまらず冬野が腕から抜け出そうとすると、腹に回った腕に力がこもった。

「……………ずるい」

小さく呟いても、返事はない。静かな寝息だけが、すぐ後ろで聞こえる。

四季風が何を考えてこんなことをするのか、冬野はなんとなくわかってしまう。だって、冬野が嫌悪してきた身体に快楽を教え込んだのは、他でもない四季風だ。

また、自分の身体がおかしくなる。

そんな予感を最後に、冬野は眠りに落ちた。

翌日になって、冬野は四季凧と一緒に大学に向かった。

混んだ電車の車内で、四季凧は冬野の後ろに立った。押されて密着したところで、腰に手が回される。

いつものように、守ってくれているのだと思った。人の圧に押されないよう、庇ってくれるのだと。

けれどその手は、するりと尻を撫でてきた。

「……っ、え、」

尻のかたちを確かめるように撫でまわされる。声が出そうになって、冬野は唇を噛んだ。

四季凧はドアと座席のスペースにおさまる冬野を隠すように立ち、壁のようになっているから、バレることはない。それでもどくどくと心臓が跳ねた。

「……っ、」

指が太腿の外側へ移る。付け根に近いところを

つう、となぞられて、膝が震えた。おそろおそろ顔を上げる。四季風は何食わぬ顔で、太腿を撫でてくる。

やがて四季風の手が、腰から脇腹をゆっくり上がってきた。肋骨をひとつずつ数えるみたいに這って、それから、胸の上で止まる。きゅ、と乳首を摘まれて、冬野は背中を丸めた。

「……や、……♡」

息があがる。

もしもすぐ近くにいる乗客が、少しでも視線をこちらに向けたら。その想像だけで、顔が熱くなる。

やめろ、と言えればいい。言えなきゃと止めてくれる。だって人目があるんだから。

それを分かっている、冬野は何も言えなかった。ようやくホームに降りたとき、大きく息を吐いた。

「はは、顔赤いよ」

「……誰の、せいだと、」

「いやー、てっきり振り払われると思ったんだけどな。なんで止めなかったの？　もしかして興奮してた？」

「……」

カントボーイ(乳首開発中)が おちんぼケースの自覚を持つ話♡

発行日 : 2026年8月
発行者 : 茉夏乃
X : @manatsuno328
連絡先 : manatsuno328@gmail.com

- この作品はフィクションです。実在の人物・作品・団体・出来事などには関係ありません。
- この本は個人が発行したものです。
- 本書の転載、編集、トレース、転売、使用を禁止します。
- 本作品の著作権は作者に帰属します。
- 購入者ご本人のみお楽しみください。
- AI学習データへの利用を禁止します。

- This is a work of fiction. Any resemblance to actual persons, living or dead, works, organizations, events, or locales is entirely coincidental.
- This work is private individual.
- DO NOT REPOST, EDIT, TRACE, RESELL OR USE MY WORKS.
- All rights reserved. Copyright of this work belongs to the author.
- This work is intended solely for the individual purchaser.
- Use of this work for AI/machine learning training is prohibited.